

## 新型コロナウイルス感染症流行下における 保育実習Ⅱの学内代替演習に関する実践報告

安部 日珠沙

### Educational Practical Report about the Substitute Seminar for second Nursery Training under Covid-19 infection.

Kazusa ABE

#### 要旨（抄録）

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、本学は幼児教育学科第一部における令和2年度の保育実習Ⅱを中止するとともに、学内での演習等による代替措置（以下、学内代替演習）を実施した。本稿は、筆者が企画・立案した学内代替演習の授業実践の経過を報告するとともに、学内代替演習の成果と課題について考察したものである。今回の学内代替演習では、映像資料の視聴や模擬保育の実践に関するグループ活動を中心とした授業を計画し、学生が相互に学び合いながら保育の専門性を高めていくことを目指した。その結果、今回の学内代替演習の学修成果として、多面的・多角的な視点に基づく思考力や理解力の伸長、積極的な意見交換の重要性への気付きなどを挙げる学生が多く見られた。授業実践としては一定の成果を収められたと考えられるが、急場凌ぎの面も否めないため、より効果的な学内代替演習の如何については、さらなる精査と検証を踏まえた探究の必要があろう。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、保育実習Ⅱ、学内代替演習、グループ活動

#### I. 背景と経緯

令和元年12月に中華人民共和国湖北省武漢市で発生し、我が国においても令和2年1月中旬に第1例目の感染者が確認された新型コロナウイルス感染症は、罹患状況の深刻化に伴い、児童生徒や学生等の修学にも大きな影響を与えた。政府は同年2月下旬に、感染のリスクを予防する観点から、全国の小学校、中学校、高等学校等について、臨時休校を行うよう要請している。従来の教育形態が、新型コロナウイルス感染症の流行に耐えうるものではないと判断されたが故の施策であろうが、それ以降、全国の教育・保育の現場では、with コロナを踏まえた子どもの学びや育ちの在り方が模索され、地域の流行状況に即して様々な対策が採られるようになった。

このような状況の中で、本学をはじめ全国の指定保育士養成施設（以下、養成施設）においては、通常授業の運営の如何と併せて、学外実習の実施に対する懸念が高まっていた。厚生労働省はこの問題について、学生の修学等に係る不利益の発生という観点から、同年3月2日付けの事務連絡の「養成施設の運営に係る取扱い」の中で、以下のような通知を行っている。

養成施設にあつては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等に

より、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと<sup>1)</sup>。

注目されるべきは「実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施すること」が認められたことである。本来的に、保育実習は「保育士資格を取得するために、児童福祉施設で行う現場実習のこと」<sup>2)</sup>であり、かつ、厚生労働省が「保育実習実施基準」に定める実習施設と実習日数において実施される実地体験学習である<sup>3)</sup>。しかし新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、「実習施設の確保」や「実習施設の代替」が難航することが予想されたことから、児童福祉施設の保育士に代わって、養成施設の教職員が、養成施設内において保育実習を実施することが可能となったのである。翻って考えれば、全国の養成施設は、全国の新型コロナウイルス感染症の流行という未曾有の状況下におけるこの特別措置に基づいて、実習を中止せざるをえなくなった場合におけるカリキュラムの変更と、従来の学外実習と同様の教育成果を得ることができる学内実習の指導計画の作成という、新しい課題に直面したのである。

筆者が実習担当（保育所）を務める本学の幼児教育学科第一部では、卒業年次の8月に保育実習Ⅱが設置されており、年度を超えて実習を実施することはできない状況にあった。しかも県内には同様の事情を抱えた養成施設が多数あり、年度当初から、実習先の確保や時期の調整は困難になることが予想されていた。同年4月7日に緊急事態宣言（同月16日に対象を全国へ拡大、翌月25日に解除）が発令されたとき、本学は、学生の健康と安全の確保、地域の医療崩壊への憂慮、保育現場の混乱への配慮などの観点から、同年5月に実施予定だった教育実習Ⅱと、同年6月に実施予定だった保育実習Ⅰ（児童福祉施設等）の延期を決定した。しかし2種類の実習が同時に延期されたことによって、後期のカリキュラムにも大幅な変更が生じたことから、幼稚園教諭二種免許と保育士資格の取得に係る残り全ての学外実習を如何に年度内に実施するか、かつ、他の履修への影響を如何に最小限に留めるかが、本学における新たな問題となった。本学はこれについて幾重にも議論を重ねた末に、保育実習Ⅰ（児童福祉施設等）を同年8月に、教育実習Ⅱを同年10月頃に実施することと、同年8月に予定していた保育実習Ⅱ・Ⅲを中止することを決定した。後者の決断に関しては、保育実習Ⅰの履修を終えていなければ保育実習Ⅱ・Ⅲを履修することができないという制度的な事由により、保育実習Ⅰ（児童福祉施設等）の早急な実施が求められたことが挙げられる。また、保育実習は、究極的には「実習に代えて演習又は学内実習等を実施すること」も可能であったことから、本学は保育実習Ⅱ・Ⅲの中止を判断し、学内での演習等による代替措置＝学内代替演習を講じることにしたのである。以上のような決定を受けて、幼児教育学科第一部の保育実習Ⅱを担当していた筆者は、以下の如き保育実習Ⅱに係る学内代替演習の授業を企画・立案し、実践に取り組むことになった次第である。

## Ⅱ. 学内代替演習の構成・内容

### 1. 授業計画の作成

本来的に保育実習Ⅱは、実習施設における約10日間の学修をもって2単位を取得する科目であるが、学内代替演習において同様の単位を取得するためには、60時間＝40コマ分の演習授業を実施する必要があった<sup>4)</sup>。本学ではこれを、教務委員会および教授会での審議を経て、令和2年度後

期時間割表における月曜日の4・5時限目を割り当てることによって26コマを確保し、土曜日や補講期間を利用することによって14コマを確保した。

また、学内代替演習の授業計画作成時、本学における講義・演習の授業形態は、新型コロナウイルス感染症拡大防止と学生の学修機会の保障との両立などの観点から、オンライン教材やビデオ会議システム（Google Meet等）、本学独自のeラーニングシステムであるMANALOGを活用した遠隔授業での実施が原則となっていた。厚生労働省は、令和2年3月2日付けの事務連絡の「保育士資格の取扱い」の中で「養成施設にあっては、時間割の変更、補講授業、インターネット等を活用した学修、レポート課題の実施等により必要な教育が行われる」<sup>5)</sup>ことを要請するとともに、同年6月15日付けの事務連絡のQ&Aでは、実習を演習により代替する場合は「遠隔授業など、対面でない形態で実施することは差し支えない」<sup>6)</sup>と述べている。これを受けて、本校では、学内代替演習の授業内容および全ての教材と課題を、遠隔授業にも対面授業にも堪えられるように構成した。同時に、授業については、感染拡大防止策の徹底は勿論、学生が月曜日の3時限目の授業のために登校する場合のみ実施するなど、限定的かつ必要最低限の回数に留めるようにした。

学内代替演習は、令和2年9月28日から令和3年1月18日にかけて、保育実習Ⅱを履修する本学の幼児教育学科第一部2年生41名を対象に、40コマ中32コマを遠隔授業（リアルタイム型26コマ・課題提示型6コマ）にて、残り8コマを対面授業にて行った。以下は、筆者が実際に計画し実施した授業の内容と概要について示したものである。

表1 学内代替演習の授業内容・概要

回	内 容	概 要
1	昨今の保育情勢について考える【映像資料】1	映像資料から、昨今の新型コロナウイルス感染症の流行下における保育現場の保育士の業務、職業倫理、実践等について理解を深める。また、ディスカッションを通じて意見交換を行い、グループとしての意見をまとめ、発表する。
2	昨今の保育情勢について考える（グループワーク）1	
3	昨今の保育情勢について考える【映像資料】2	
4	昨今の保育情勢について考える（グループワーク）2	
5	昨今の保育情勢について考える【映像資料】3	
6	昨今の保育情勢について考える（グループワーク）3	
7	観察記録（未満児）の作成【映像資料】	映像資料から、未満児の1日の様子を観察し、記録を作成するとともに、未満児の発達の特徴をテーマとしたグループワーク（ディスカッション）を行う。また、グループとしての意見をまとめた資料を作成し、それをもとに発表を行う。
8	観察記録（未満児）の作成（グループワーク）	
⑨	観察記録（未満児）の発表準備（グループワーク）・発表1	
⑩	観察記録（未満児）の発表2	
11	日誌（2歳児）の作成【映像資料】1	映像資料から、2歳児クラスの1日の様子を観察し、各人で日誌（2歳児）を作成する。
12	日誌（2歳児）の作成【映像資料】2	
13	指導案（2歳児）の作成（グループワーク）1	各人で作成した日誌（2歳児）をもとに、グループごとに部分保育（2歳児）の指導案を作成し、模擬保育（保育実践発表）の準備に取りかかる。
14	指導案（2歳児）の作成（グループワーク）2	
15	指導案（2歳児）の発表準備（グループワーク）	
⑯	保育実践発表1	グループごとに、指導案（2歳児）に即しながら、模擬保育（保育実践発表）を行う。また、グループごとに、自グループの模擬保育（保育実践発表）に対する反省・評価を行い、課題を明確にする。
⑰	保育実践発表2	
⑱	保育実践発表3	
⑲	自グループの発表への反省・評価（グループワーク）	
20	他グループの発表への評価（グループワーク）1	他グループの模擬保育（保育実践発表）に対する評価を行う。また、他グループからの評価をもとに、改めて自グループの発表に対する反省・評価を行い、課題をより明確にした上で、指導案（2歳児／改善案）を作成する。
21	他グループの発表への評価（グループワーク）2	
22	他グループからの評価の分析（グループワーク）	
23	指導案（2歳児）（改善案）の作成（グループワーク）	
24	指導案（2歳児）（改善案）の作成（グループワーク）	

㉔	指導案（2歳児／改善案）の発表準備（グループワーク）1	グループごとに指導案（2歳児／改善案）を作成し、発表・質疑応答を行うことを通じて、保育計画（指導案）をより良く改善するための方法や、より良い保育の在り方について理解を深める。
㉕	指導案（2歳児／改善案）の発表準備（グループワーク）2	
27	指導案（2歳児）（改善案）の発表1	模擬保育に関するまとめのワークを個人で行う。
28	指導案（2歳児）（改善案）の発表2	
㉙	実践発表・改善案発表のまとめ1	映像資料から、5歳児クラスの1日の様子を観察し、観察記録を作成した上で、未満児の観察記録との比較・分析を行い、自分の意見をまとめる。
㊀	実践発表・改善案発表のまとめ2	
31	観察記録の作成（5歳児）【映像資料】	未満児と5歳児の発達の比較分析をテーマにしたグループワーク（ディスカッション）を行い、自身の子ども観や発達観を省察・反省する。また、発表を通してグループごとに互いの意見を批評し合いながら、子どもの発達に対する理解をより深める。
㉒	観察記録（未満児）との比較・分析	
33	観察記録の比較・分析（グループワーク）1	他グループからの批評をもとに、子どもの発達の特徴に関するワークのまとめを行う。
34	観察記録の比較・分析（グループワーク）2	
35	観察記録の比較・分析の発表1	これまでの学習に対する反省・評価を行い、グループごとに、かつ、個人ごとに、実習の成果や今後の課題を明確にする。
36	観察記録の比較・分析の発表2	
㉓	他グループからの評価の分析	無印…遠隔授業（リアルタイム型） □…遠隔授業（課題提示型） ○…対面授業
㉔	自グループの発表への反省・評価	
39	実習の成果と課題（グループワーク）	
㊁	実習の成果と課題（自己評価）	

無印…遠隔授業（リアルタイム型） □…遠隔授業（課題提示型） ○…対面授業

## 2. 授業方法の設定

学内代替演習の授業方法には、学生の積極的な授業参加の促進を図るべく、ディスカッションを主としたグループワークとそれに関する発表・質疑応答、個人で取り組むワークの3つを採択した。表1に示されているように、学内代替演習の40コマ中27コマが、所謂グループ活動で構成されている。残り13コマは個人でワークに取り組む時間として構成されているが、内8コマはグループ活動のための準備時間となっている。学内代替演習にグループ活動を取り入れること自体は、全国の養成施設で既に実施されている学内代替演習の最も一般的な手法のひとつであり、筆者もまたこれに肖る仕方でもグループ活動を学内代替演習の手立てとした。同時に、グループ活動としての学内代替演習を、学生相互の多面的・多角的な意見交換を通じて、保育について総合的に理解を深めながら、保育に関する多様な視点と広い視野を得るための有意な手立てとして位置付けた。実際に、保育現場で働く保育士には、子どもの姿や育ちを多面的・多角的に理解する能力が求められている。物事を多面的・多角的に捉えたり考えたりするためには、他者の視点に触れ、取り入れていくことも必須となる。それ故に「学生にとって、ほかの学生がどのようなことを考え、書いたのかを知る機会」<sup>7)</sup>でもあるグループ活動はその最たる手法となりえた。

だが、松尾・野島が指摘するように<sup>8)</sup>、グループでの学修活動では「班員がそれぞれのよいところや知恵を出し合って協力すること」が目指される一方で、「グループの優位者に任せて、他の班員は考えることをやめてしまう」ということも起こりえる。グループ活動の成否は、如何に学生一人ひとりが緊張感をもって授業に参加できるかにかかっている、即ち、各人の授業参加度を高めることによって特定の「優位者」を生み出さないための工夫が必要となるのである。「優位者」の発生を防ぐ措置の一環として、グループワークにおいては、まずはグループのメンバー全員が自分の意見を発表し、他の構成員の意見をワークシートに整理・記録し終えてから、前回と異なる司会役1名を選出した上で、ディスカッションを始めるように徹底させた。

学内代替演習の授業の基本的な流れとして、まずは個人でワークに取り組み、続けてグループワー

クを行い、グループごとに意見をまとめて、クラス全体での発表に臨むという、ある種の学修の連続性と発展性を意識して設定した。とくに後者については、学生が、個別一部分全体という段階を踏みながら、徐々に視野を広げていくことができるように配慮した。課題に対する自身の分析・考察・意見等を、個人－グループ－クラスという3種類の見地から、相互に批評したり批評されたりすることを通じて、学生一人ひとりが繰り返し自分の学修を振り返り、より多面的・多角的な視点から課題を捉え直していくことが期待されたのである。

学修活動の拠点となるグループについては、2歳児クラスでの活動を想定した模擬保育（保育実践発表）の実施にも鑑みて、41名の学生を1グループ6～7名ずつ6グループに分けた<sup>9)</sup>。グループは、基本的には筆者が学生名簿をもとにランダムに編成したが、相互に多種多様な保育現場での体験談に触れることができるように、保育実習Ⅰ（保育所）を同じ実習施設で実施した学生が同じグループに配属されないように編成した。

### 3. 授業内容の構成

学内代替演習の授業内容は、年度開始時点で保育実習Ⅱのシラバスに設定されていた「到達目標及びテーマ」を踏まえて、筆者が独自に構成した。本学は「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための遠隔授業に伴うシラバス修正・追記について」をもって、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う授業方法・内容などの変更を認めており、保育実習Ⅱもまた学外実習から学内代替演習の実施へと移行したことに伴い、シラバスにおける授業内容と授業数に大幅な修正・追記が行われた。しかし「到達目標及びテーマ」「授業の概略」などの授業の特性や方針の根幹に抵触するような項目については変更不可の措置が取られたことから、学内代替演習の授業内容も学外実習としての保育実習Ⅱと同じ授業目標のもとに組織する必要が生まれた。また「到達目標及びテーマ」は、学生が学修を通して「できるようになること」を列挙したものであるが、保育実習Ⅱの場合、本来的には保育現場での学修を前提として組織されたものである。それ故、養成施設における授業での学修という前提の全く異なる教育環境のもとで、如何にこれらを学生が達成しえるように授業内容を構成できるかが、学内代替演習の授業計画を立案する上での課題となった。

令和2年度の保育実習Ⅱの「到達目標及びテーマ」として、本学では「子どもの観察や関わり」の視点を明確にすることを通して、「保育への理解を深める」、「適切に環境を構成し、生活・遊びを促す教材研究や援助ができる」、「一人ひとりの子どもを理解しつつ、保育者の指導の意図を汲み取り、個と集団の姿に対応できる」「保育の計画、実践、観察、記録、自己評価等に実際に取り組み、より良い保育を追求していくことができる」、「保育士の業務内容や職業倫理を実践と結びつけて理解し、自己の課題を明確化する」という5つの項目を挙げている。

1つ目の「子どもの観察や関わり」の視点を明確にすることを通して、「保育への理解を深める」については、保育現場での1日の生活を撮影した市販の映像資料を2回視聴した後、保育士の援助や関わり方、子どもの発達の過程、特徴、状況などの視点からの観察記録の作成をもって到達を目指した。映像での子どもの観察は、「非参与観察」であるが故に、「状況に応じて重要な行動を選択的に観察するなど柔軟な対応ができない」ことや「ビデオによる間接的方法のため、音声の聞き分けが困難で、視野も一定である」ことなどが短所として挙げられる<sup>10)</sup>。しかし映像資料における観察は、映像であるが故に繰り返し視聴することができるため、1回目の視聴で見逃したり気付かなかったりしたことを、2回目の視聴で確認することができるという利点もある。映像であるが故に「視野」が固定されていることは事実だが、逆を言えば、子ども達の心身の状態や活動、保育士の

実践、1日の生活の流れや展開などを、ひとつの「視野」から腰を据えて観察することができるとも言える。ひとつの保育の実態から、保育の在り方について集中的に考察したり理解を深めたりすることができるという点においては、むしろ長所として作用するだろう。さらに、子どもの年齢が異なると、子どもの心身の状態や活動の様子も、保育士の子どもに対する働きかけも異なることへの理解を深めるために、未満児クラスの映像資料と5歳児クラスの映像資料をそれぞれ視聴し、各々の観察記録を作成した上で、両者の保育の在り方を比較検討することができるようにした。

2つ目の「適切に環境を構成し、生活・遊びを促す教材研究や援助ができる」については、2歳児を対象とした模擬保育の実施をもって到達を目指した。学生は、2歳児の保育に関する映像資料を視聴した後、グループごとに指導案の作成と教材の準備に取りかかり、保育士役と子ども役に分かれて模擬保育を実践した。自分達が2歳児として振る舞うことを念頭に、保育計画を立てるためには、保育士になりきって子どもの目線に立つのみならず、子どもになりきって子どもの目線に立つ必要がある。また、映像資料から読み取ることでできる2歳児の実際の姿と、2歳児の発達の段階や過程についての理論を照らし合わせながら、2歳児に相応した姿を思い描き、自らそれを実演するためには、子どもに対するより客観的で深い理解が求められることになる。勿論、学生が同級生相手に2歳児の姿を演じ切ることに限界があり、実際の2歳児との関わりとは大きな違いがあることも事実だろう<sup>11)</sup>。しかし子どもがどのように保育士を受け入れたり、保育士に自分の思いや欲求を伝えたりするのかを、純然に子どもの目線において考察したり、予想したり、表現したりしなければならない点においては、子どもにとっての保育ないし生活や遊びの在り方を、子どもの目線から改めて見つめ直す機会ともなりえよう。

3つ目の「一人ひとりの子どもを理解しつつ、保育士の指導の意図を汲み取り、個と集団の姿に対応できる」は、本来的に、日々の保育において、保育士が一人ひとりの子どもや集団の実態をどのように把握し、どのような理由や目的において、どのような援助や関わりを行っているのかを観察し、自らもそれをもとに実践してみようとするものである。これについては、1つ目の到達目標と同様に、映像資料での保育士の動きや実践の観察をもって到達を目指した。

4つ目の「保育の計画、実践、観察、記録、自己評価等に実際に取り組み、より良い保育を追求していくことができる」については、とくに「保育の過程」である「循環的な過程」<sup>12)</sup> (PDCAサイクル) を重視した学修が重要であると考えられた。そこで、模擬保育の前に、他グループの指導案を配布することで自グループの指導案と比較検討できるようにしつつ、模擬保育の後に、グループごとの自己評価と他グループからの批評を総合した指導案の改善案の作成・発表を行うことをもって到達を目指した。まず、各グループには、自分達の模擬保育の良かった(上手かった)点と悪かった(上手いかなかった)点を明らかにさせ、総評を踏まえた改善策を講じさせた。次に、他グループの模擬保育に対する評価として、良かった(上手かった)点と悪かった(上手いかなかった)点を踏まえた具体的な改善策を提案させるとともに、指導案の加筆修正が必要な箇所を指摘させた。続けて、他グループの評価から自グループの模擬保育の良かった点と悪かった点とを総合的に分析し、悪かった点に対する具体的な改善案を検討した上で、指導案の改善版の作成・発表を実施した。このようなグループワークを通じて、グループごとに自分達の指導計画と実践との両方から振り返るとともに、他グループと相互に評価したり評価されたりしながら保育に対する視野を拡張していくことで、日々の保育をより良いものにしようとする資質や能力を伸長させることができると考えられた。

最後の「保育士の業務内容や職業倫理を実践と結びつけて理解し、自己の課題を明確化する」に

ついては、3つの観点から授業内容を構成し、それぞれの到達を目指すことをもって、総体的な達成を目指した。1つ目の「保育士の業務内容や職業倫理」に関しては、当時の保育現場の取組事例に係る映像資料の視聴をもって到達を目指した。保育士の業務内容や職業倫理は、保育所保育指針および保育所保育指針解説、保育士倫理綱領などの資料に詳しいが、どれも保育士が実際の保育に携わる上での前提であり、とくに保育士の専門的な知識や技術および判断は倫理観によって裏付けられていなければならないとまでされている<sup>13)</sup>。保育士という職業に係る普遍的な業務や倫理観について、学生は保育実習指導や他の授業を通じて理論的に学修するとともに、保育実習Ⅰを通じて或る程度の実感を得ていたところではあるが、新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」<sup>14)</sup>における保育実践および保育士としての在り方に関しては、まだ十分な学びの機会と成果を得られていない状況にあった。そこで、学内代替演習の授業計画作成時、新型コロナウイルス感染症に対応した保育所等の取組事例が、インターネット等を通じて積極的に紹介され始めていたことに鑑み、新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」に基づき、多様な保育を展開する当時の保育現場の状況や保育に関わる保育士の思いなどを紹介している映像を教材として取り上げた。映像から、現場の保育士の様々な試行錯誤、工夫やアイデアに触れることによって、新型コロナウイルス感染症流行下における保育士の業務内容や職業倫理などへの理解を深めることができると考えられた。新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」における新たな保育実践の在り方に関する映像資料も活用し、新型コロナウイルス感染症の拡大によって生じた様々な保育の課題を、自分達の今後の課題として受け止め、具体的に如何なる工夫や取組が考えられるかを話し合わせることで、倫理的な側面からも保育士を目指す上での自己の課題を捉えることができるように配慮した。2つ目の「実践と結びつけて」に関しては、既述のように、保育実践そのものが保育の内容と倫理観の把握を前提としていることから、映像資料に係る学修事項を踏まえて模擬保育を計画・実践し、振り返りを行うところにおいて到達を目指した。3つ目の「自己の課題を明確にする」に関しては、最後の授業日に、学内代替演習の成果と課題の振り返りを行うことをもって到達を目指した。グループ単位での学びの成果と今後の課題を明確にし、課題については改善案を提示させるとともに、個人単位でも同様に学びの成果と今後の課題を明らかにさせることで、自ら継続的に学びを深めていけるようにした。

#### 4. アサイメントの設定

学内代替演習の成績評価に係るアサイメントは、表2に示したような17種類の課題・提出物を設定した。これらは、個人に課されるもの(9種類)と、グループに課されるもの(8種類)とに分けられており、後者の提出については、グループごとに提出者1名をそのつど選出し、提出者がグループを代表して筆者まで提出することになっていた。

表2 学内代替演習の提出物の種類

回	内容	アサイメント
1	昨今の保育情勢について考える【映像資料】1	【ワークシート1, 2, 3】(個人) : 映像資料の内容を観点ごとにまとめる。 : 映像資料の内容に対する自分の意見をまとめる。 : グループメンバーの意見等を記録・整理する。 : 他グループの意見等を記録・整理する。
2	昨今の保育情勢について考える(グループワーク)1	
3	昨今の保育情勢について考える【映像資料】2	
4	昨今の保育情勢について考える(グループワーク)2	
5	昨今の保育情勢について考える【映像資料】3	
6	昨今の保育情勢について考える(グループワーク)3	

7	観察記録(未満児)の作成【映像資料】	【観察記録(未満児)】(個人) ：映像資料の内容を3つの観点からまとめる。
8	観察記録(未満児)の作成(グループワーク)	【発表用レジュメ】(グループ)
9	観察記録(未満児)の発表準備(グループワーク)・発表1	：各人の【観察記録(未満児)】をもとにグループで行った分析・考察等をまとめる。
10	観察記録(未満児)の発表2	
11	日誌(2歳児)の作成【映像資料】1	【日誌(2歳児)】(個人)
12	日誌(2歳児)の作成【映像資料】2	：映像での観察を通し、日誌を作成する。
13	指導案(2歳児)の作成(グループワーク)1	【指導案(2歳児)】(グループ)
14	指導案(2歳児)の作成(グループワーク)2	：各人の【日誌(2歳児)】をもとに、2歳児クラスを対象とした20分程度の保育指導案を作成する(保育者役1～2名、子ども役4～6名)。
15	指導案(2歳児)の発表準備(グループワーク)	
16	保育実践発表1	【ワークシート4】(グループ)
17	保育実践発表2	：自グループの模擬保育の実践において、上手くいった・いかなかった点や、良かった・悪かった点を列挙し、改善策を踏まえて総評する。
18	保育実践発表3	
19	自グループの発表への反省・評価(グループワーク)	
20	他グループの発表への評価(グループワーク)1	【ワークシート5】(グループ)
21	他グループの発表への評価(グループワーク)2	：他の6グループ全ての模擬保育および指導案の内容を評価し、良かった・悪かった点や、改善案を具体的に挙げ、総合的な所見をまとめる。
22	他グループからの評価の分析(グループワーク)	【ワークシート6】(グループ)
23	指導案(2歳児)(改善案)の作成(グループワーク)	：【ワークシート5】をもとに、自グループの模擬保育に対する他の6グループからの評価を分析して具体的な改善案をまとめる。
24	指導案(2歳児)(改善案)の作成(グループワーク)	
25	指導案(2歳児/改善案)の発表準備(グループワーク)1	【指導案(2歳児/改善案)】(グループ)
26	指導案(2歳児/改善案)の発表準備(グループワーク)2	：【ワークシート4,6】をもとに自グループの模擬保育を改めて省察し、【指導案(2歳児)】の課題を明確にした上で、加筆修正に取り組む。
27	指導案(2歳児)(改善案)の発表1	
28	指導案(2歳児)(改善案)の発表2	
29	実践発表・改善案発表のまとめ1	【ワークシート7】(個人)
30	実践発表・改善案発表のまとめ2	：他グループの【指導案(2歳児/改善案)】を、6グループごとに、4つの観点から批評する。 ：自グループの【指導案(2歳児/改善案)】に対する他グループのからの批評を分析する。
31	観察記録の作成(5歳児)【映像資料】	【観察記録(5歳児)】(個人)
32	観察記録(未満児)との比較・分析	：映像資料の内容を観点ごとにまとめる。 ：【観察記録(未満児)】の内容と比較検討し、未満児と5歳児の保育の違いを分析し、まとめる。
33	観察記録の比較・分析(グループワーク)1	【ワークシート8】(グループ)
34	観察記録の比較・分析(グループワーク)2	：各人の【観察記録(未満児)】と【観察記録(5歳児)】をもとに、観点ごとに各々の特徴と両者の相違点等をまとめる。 ：未満児と2歳児の発達の違いについてグループで考察したことをまとめる。
35	観察記録の比較・分析の発表1	【ワークシート9】(グループ)
36	観察記録の比較・分析の発表2	：自グループに対する他の6グループからの批評の内容をそれぞれ記録・整理する。
37	他グループからの評価の分析	【ワークシート10】(個人)
38	自グループの発表への反省・評価	：【ワークシート9】をもとに、他グループからの批評を総括した上で、未満児と5歳児の発達の特徴に対する自分の意見をまとめる。
39	実習の成果と課題(グループワーク)	【ワークシート11】(個人)
40	実習の成果と課題(自己評価)	：グループとしての実習の成果と課題を挙げ、課題に対しては改善案を講じた上で、総評を行う。 ：個人としての実習の成果と課題をまとめる。



発表に係るアサイメントとして、1グループの発表が終わるごとに質疑応答の時間を設け、質問者は、発表に対する批評や所感を述べた上で、発表者に対する質疑や質問を必ず1つ以上行うように指導した。質疑応答においては、学生に良い意味での緊張感を与えるために、あらかじめ他の3グループに指定質問者を1名ずつ選出するように伝えておき、指定された質問者に係る質疑応答が終わった後に、全体的な質疑応答のための時間を設けた。また、同様の意図に基づき、発表者と質問者は、前回と異なるメンバーの中から別々に選出することを原則として、より多くの学生が、自分のグループの分析・考察・意見等を、実感を伴って我が事として受け止め、捉え直し、反省する機会となるようにした。

### Ⅲ. 学内代替演習の意義

令和2年度の保育実習Ⅱを、学内代替演習をもって実施することが決定されたとき、具体的な授業の内容や方法等に関する課題と併せて、学修の意義に関する課題も生じた。即ち、学内代替演習の授業に対する学生の姿勢が、受動的・消極的にならないようにするという点において、如何に学内代替演習もまた意義ある学修となりえるかを示しておく必要が生じたのである。

概して、実習の要諦とは、保育現場で、実際に子どもと関わりながら、現役の保育士からの専門的で実践的な指導や評価を受けることができるという点に存する。本学では、実習は「大学の講義で得られた知識を実践の場で活用したり、実際に子どもや職員の方々とは触れあったりすることで生の現場を知ることができる、非常に貴重な場」<sup>15)</sup>と位置付けられており、課程における授業の多くが、学外実習を見据えた内容となっている。学外実習が中止されるということは、本学における今までの学びの帰結点を喪失するという点でもあるが故に、それに伴う学生の学修意欲の低下が懸念されたのである。

筆者は、学生に学内代替演習の実施をMANALOGにおいて告知する際、以下の3つの長所を提示するとともに、学びへの積極的な姿勢なくして如何なることから十分な成果を得ることは叶わないこと、学内代替演習だからこそ学べることやできることがあることを喚起した。

- ①ひとつの課題について、その都度、その場でじっくり考える時間が設けられている。
- ②自分と同じ目線に立って課題を共有し、意見を交わし合える仲間がいる。
- ③グループワークや発表を通じ、ひとつの課題についてより多面的・多角的に考えたり理解を深めたりすることができる。

①に挙げたように、学内代替演習の長所は、時を移さずその話題や課題の考察に取り組むことができることにある。保育現場では「子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込みきって、心に一寸の隙間も残らない」のが常であり、「子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる」<sup>16)</sup>のがならないとなっているはずである。学外実習でも事情は同じだろうが、翻って考えれば、そのときどきの保育士の働きかけの意図や願い、子どもの態度や言動の理由、原因、伝えようとしていた思いや気持ちなどを、その場でそのまま熟考できるような余裕は、学外実習にはないのである。これは、保育現場が流動的なものであり、変わり続ける子どもの実態や子どもを取り巻く状況への即時的かつ細やかな対応が求められるからに他ならないが、如何なることについてもその日の実習を終えてからでなければ振り返ることができないことに違いはない。目の前に起こる様々な保育の話題や課題について、後か

ら思い出しながら考えるのではなく、今その場で受けた印象や感じたことをもとに考えるという学びの機会は、学内代替演習ならではのものとも言えよう。

また、②に挙げたように、学内代替演習の長所は、同級生との共同的・協働的な学習の機会となるという点に見出すことができる。既述のように、学内代替演習の大半はグループワークないしグループ活動によって構成されているが、これは、複数の学生同士で様々な保育の話題や課題を共有し、各々の見地からの分析や考察を踏まえながら、改めて一緒に深く考えたり学んだりすることができることを期待してのものでもある。本学では、厚生労働省の「実習施設に1回に派遣する実習生の数は、その実習施設の規模、人的組織等の指揮能力を考慮して定めるものとし、多人数にわたらないように留意するものとする」<sup>17)</sup>という規定と、実習施設側の意向とに鑑み、派遣する学生の人数が1施設につき1～2名となるように調整することも少なくない。実際に、学生の大半は独りで実習を実施しており、複数人がひとつの施設で実習を行う場合でも、実習施設が1名ずつ違う学年やクラスに配属することが殆どである。言い換えれば、学生にとっての学外実習とは、学内代替演習のような集団学習とは全く異なる、個別学習なのである。それ故に、学外実習においては、同等の立場から意見を交換したり、話題や課題を共有したりすることのできる相手が不在であり、日々の保育の振り返りと内省も個別的なものとならざるをえなくなる。翻って考えれば、②に係る学内代替演習の本質は、各人が、これまでの授業および保育現場にて修得した、保育者に必要な専門的な知識と技術を、個人においては勿論、集団においても内省することができる場所にあると言えるだろう。保育における内省自体は、学外実習でも恒常的に行われており、決して学内代替演習に特徴的な学習の方法という訳ではない。しかし学外実習における内省は、原則的には、担当保育者からの指導評価をもとに行われる、即ち、ほぼ1名か2名の視点からの指導評価をもって行われるものなのである。その意味において、現役の保育者からの指導評価は、専門的で実践的な見地に基づく貴重な学びの材料となる一方で、絶対的に見られるならば、多角性に欠けていることは否めない。反対に、学内代替演習では、現役の保育者に比すれば専門性は劣らざるをえないものの、自らと同等の保育に関する知識と技術を備えた学生同士が、グループワークにおいて互いに教え合うという点において、より多面的・多角的な評価と内省が期待されると言えよう。加えて、学外実習は原則的に、保育者－実習生という上下関係のもとに行われているため、担当保育者との関係性や実習施設の雰囲気等によっては、学生が気軽に相談や質問をすることができないことも考えられる。しかし学内代替演習のグループメンバーは、全員が自分と同格の立場の学生であり、かつ、学内代替演習自体が普段の授業と同じように行われている点において、学生にとっては、学内代替演習の方が、保育に関する自分の様々な意見を忌憚なく主張できる学習環境であるとも考えられるのである。

そして、③に挙げたように、学内代替演習の長所は、様々な保育の話題や課題を全員で共有したり、それについて一緒に考察したり学習したりする中で、多面的・多角的な観点から、保育者としての資質や能力を互いに高め合っていくことができる場所にもある。上述のように、学内代替演習における学習活動は、ディスカッションを主体としたグループワークと、グループワークにおいて共同作成した課題に係る発表・質疑応答と、個人で取り組むワークとによって構成されている。多数の同級生との連携的・協働的な学習が原則となるが故に、多面的・多角的な思考を通じて、学びに広がりや深まりが生まれやすくなると言える。様々な保育の話題や課題について、色々な側面や角度から捉えて分析し、自分の考えを構築することまでは、学外実習においても十分に実現可能であろう。だが、より本質的に保育の問題について考察し、理解を深めためには、多様な視点に立つて

自己の見解を反省することが必要となる。第三者の意見や評価へ積極的に関わり、客観的かつ多種多様な視点を取り入れて自らの意見や考えを見直さなければ、自分の狭い視野の内側での保育理解しか得られないだろう。しかし学内代替演習においては、グループワークや発表を通じて、学生が互いの気付きを共有し、共通理解を図りながら、互いの感じたことや考えたことをその場でそのまま話し合うことができる。それによって、自分では思い至らなかったことや気付かなかったことを知ったり、自分にはなかったものの見方や考え方、感じ方に触れたりするなどといったことも期待できる。畢竟、学内代替演習の意義とは、学生が共通の課題について協力して取り組み、自他の学びと気付きを共有しながら、ともに保育への理解を総合的に深めていくところにおいて、保育者としての専門的な知識や技術のみならず、視点や認識などをも深化・涵養しえるということに見出されるのである。

例年であれば、保育実習Ⅱは保育実習Ⅰ（保育所）での学びを基盤に、より主体的かつ実践的に保育へ関わりながら、保育現場での体験をさらに積み重ねることを通じて、保育の理論と実践を総合的に修得していくことを目指して行われていた。だが、新型コロナウイルス感染症の流行という状況において、かつ、学内代替演習という応急的かつ限定的な教育環境下において、従来の現場実践的な学びを再現することは非常に困難である。歴とした事実として、学内代替演習は、現役の保育士による実際の保育現場での学修ではないが故に、生き生きとした知識や技能を身に付けることには向かない。したがって、学内代替演習を有意義な学修とするには、学内代替演習の意義や価値を、上記の如く明確に示すことから始めなければならなかったのである。

#### IV. 学内代替演習を受講した学生の反応

##### 1. 学修に対する学生の自己分析

学内代替演習の全授業が終了した後、保育実習Ⅱの事後指導（保育実習指導Ⅱの授業の一部）として、学内代替演習の振り返りを行った。学内代替演習ならではの諸活動を通じて、学生は、具体的にどのような経験・学び・視点などを得られたと自ら認識していたのだろうか。自身の学修成果に関する学生からの主だった回答の一例は以下の如くである。

表3 学内代替演習での学びを振り返り、反省・考察しなさい。（回答は自由記述式）

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・この授業では、子どもの発達を自分自身で観察し、グループで相談・協力しながら指導案を計画したり改善案を出したりしていた。この経験は普段の実習ではなかなかないことで、同じ経験者の立場同士が意見を出し合うことは、今後も少ないと思われるため、貴重な時間だったと考えられる。自分の過去の実習の記憶を思い出して、短い期間で準備できる教材を考えたり、環境構成をどう決めるか話し合ったりして、より良い指導案を作る過程が、この授業だからこそ経験できたものだと思う。</li><li>・仲間の意見を尊重しながら、自分も積極的に意見を述べることを意識してグループでの活動に取り組むことができた。このような仲間との意見交換をすることは、保育現場でも保育の質を高めるために必要なことであると思われる。そのため、これまでの経験を活かしながら職員間での交流を積極的に行うことが大切だと考えられる。</li><li>・グループワークから新たな意見を取り入れることができた。園生活のビデオを視聴して、未満児と5歳児の発達に違いやそれに適した保育者の援助の在り方を自分自身で考え、その後グループワークを行うことによって、気付くことができていなかった部分にも気付き、より深く考えて学び、自分の知識として身に付けることができた。実際の実習では、様々な場面に出会ったときに自分だけで考察しなければならないが、学内代替演習では複数人の考えをもとに考察したため、様々な視点から捉えることができ、現場に出たときに生かせることが増えたのではないだろうか。</li></ul> |
|---|

- ・指導案の作成において、他者と意見を出し合ったことによって、多角的な視点から学びを深めることができた。また、他のグループからの指摘を受けながら、グループの中にはなかった意見を積極的に取り入れた。さらに、実践の反省をしたことによって、その反省を活かして指導案の改善を行うことができた。他にも、子どもの個性を伸ばすために、クラスの状況を充分に把握する必要性について理解した。以上のことから、保育についての知識や考察する力を付けることができたが、今後の保育者としての活動の中で実践する力を付けていけるようにする必要があると考えられる。
- ・指導案の作成や、年齢ごとの発達の特徴等について、グループワークを通して考えることで、保育方法について様々な考え方を持つことができるようになった。指導案の作成では、自分では思い付かないような子どもの姿の予想や保育者の援助の意図を他者から聞き入れることで、以後の活動においてその考え方を参考にしながら、より子どもの状況に応じた保育方法を見出すことができるようになった。動画をもとに年齢ごとの発達の特徴を考える講義では、動画内で自分が目を向けなかった箇所に視点を置いていた他者の考えを聞き、より多くの発達の特徴に気付くことができるようになったり、環境構成や保育者の援助の意図を理解することで、それを自分の保育にも活かそうという気持ちが高まったりした。これらの成果は保育実習を実際に行うよりも強く身に付き、他者との意見交換の大切さに気付いた。
- ・子ども達と直接関わり、実際の様子を見ての活動ができなくて非常に残念だったが、クラスメイトが子ども役を行い、保育者役を決め、指導案を実践することで、使う素材はどのようなものが良いのかや、子どもとの目線の合わせ方、話すときのスピードなどについて学ぶことができた。
- ・今まで年齢ごとの比較を行うときは、子どもの視点からしか比較をすることができなかったが、この講義を通して、子どもの視点だけでなく、保育者の視点から子どもの比較をすることができるようになった。また、環境構成からも、子どもの発達に応じた比較ができるようになった。他には、グループでの指導案作成で、他者からの意見を聞くことで、自分の保育に関する視野が広がった。そして、視野が広がったことにより、専門的な知識を身に付けることができた。
- ・昨今の保育情勢について、新型コロナウイルス感染症対策をした上での工夫や、保育士だからできることを考えることができた。このように、社会情勢を踏まえて考える中で、自分にはなかった保育の工夫に気付くことができ、今後の実践の中で新型コロナウイルスと向き合いながら保育を展開する力を付けるという目標を得ることができた。指導案や日誌の作成では、過去の実習経験やグループワークなどを通して、様々な視点で保育について考えることができた。例えば、模擬保育の批評を受けて改善することで、成果と課題を明確にすることができ、より良い保育を展開できる計画を行うことができた。また、模擬保育や改善をグループで行う中で、積極的に参加しながら考えることができ、様々な視点から保育を見直すことの重要性を改めて学んだ。このように、通常とは異なる実習となったが、学内代替演習だったからこそ学ぶことができたことも多かったため、今後の実践の中で活かしていきたい。
- ・実際の保育を予想しながら子どもの姿や保育士としてどう接するかを考え直すことができた。何度もグループで試行錯誤して、指導案を考えることで、より良い保育をするためにはどのように改善したら良いかを、自分の意見だけでなくグループで意見を出し合い、さらに他のグループの意見をもらいながら指導案を考えられる活動となった。自分だけでなく、他の人の考えを聞くことができたり、自分だけでは気付くことができなかった意見を聞くことができたため、様々な意見を自分に取り入れることに繋がった。また、子どもの姿を未満児と5歳児で比較することで、年齢に応じた子どもの姿を理解することができ、それに対応した保育者の声かけや接し方を動画から学ぶことができた。それにより、子どもの年齢に応じて保育者の関わり方が変わってくることを理解することができ、今後の保育に繋げていきたいと感じた。
- ・グループ発表やグループディスカッションを通して、自分一人では考えつかなかった様々な視点からの意見を知ることで、より良い指導案を立案することができたことから、実際の保育でも職員間で協働して保育をする大切さを学べた。指導案を考える上で、保育者の願いや援助のポイントを明確にし、子どもの興味や関心にあった活動を考えることを課題としていた。この課題に対して、PDCAサイクルを通して保育を振り返り、指導案の改善を行ったことで、より子どもの姿に適した内容やねらい、保育者の願いを考えることができ、保育はPDCAをすることで、子どもに合った質の高い指導案を立案することができることを学べた。

- ・今回の実習では、実際に子ども達を目の前に行うものではなく、学生同士で模擬保育を行うことでしか実践ができなかった。そのため、初めに立てた課題が達成できるかどうかや、保育士としての知識や行動を身に付けることができるのか、正直とても不安であった。だが、実際に行ってみると、子ども達との関わりはないが、保育日誌を書くことや、動画を見て保育観察をし、そこで学んだことや気付いたことについて、学生同士で話し合いをしたり、そこから指導案を立てたりするなど、いつもなら協力して指導案を立てることではないため、貴重な経験となった。
- ・自グループでの反省や自己評価、他グループからの他者評価により、課題点や改善点に気づき、指導案を改善することができた。これらの学びから、保育の展開や改善に繋げることができるため、チームで保育を行うことは重要である。客観的に様々な視点から保育を振り返ることで、自己課題や自分では気付かなかつた改善点を見つけることができるため、自己評価や他者評価は常に行われていく必要がある。
- ・グループで指導案を作成し、保育者と子どもに分かれて部分実習を行ったことで、より子どもの目線に立って指導案を作成することができた。また、他のグループからの意見を聞いたことで、多面的に捉えて考える力を身に付けることができた。
- ・自分達で考えた指導案に基づき、保育を実践して、反省、改善を繰り返す中で、より広い視野を持って子どもを理解することができるようになったのではないかと感じる。グループで考えを出し合って考えたり、他者からの評価を受けたりすることで、新たな発見があったり、自分の学びに繋がったりすることが多くあり、様々な視点から子どもを捉えた指導案を作成することができるようになったと思われる。また、他グループからの意見をもらい、まだ柔軟な考えを持って臨機応変に対応することが難しいときがあるという自己の課題が見つかった。この授業では年齢別に子どもの成長や発達段階について比較・分析して詳しく学んだり、他グループの発表を聞いたりすることで、新たな保育の展開の仕方を学び、子どもへの声かけや援助の仕方の引き出しが増えた。

概して、学内代替演習が、多くの学生にとって、何かしらの成果を得るところの学びの機会であったことが読み取れる。とくに「他者と意見を出し合ったことによって、多角的な視点から学びを深めることができた」「他のグループからの意見を聞いたことで、多面的に捉えて考える力を身に付けることができた」などとあるように、上掲した学内代替演習の長所③に係る事項が、学内代替演習の主要な学修成果として挙げられることが多かった。その所以に関しては、子どもをより多角的に理解したり、子どもの成長や姿を多面的に読み取ったり、子どもをより全体的に捉えたりすることが、保育現場では強く求められることとも無関係ではないだろう。卒業後の保育現場での活動を見据え、保育士に必要な能力の伸長に余念のなかった学生にとって、多面的・多角的な思考力や理解力の伸長を目指す学内代替演習におけるグループ活動は、有意に働いたと考えられる。即ち、グループで課題を共有し、様々な指摘や意見を取り入れ、主観的評価と客観的評価を総合することで、多方面から課題を捉え直したり、広い視野から物事を俯瞰したり、自らの認識を改めたりする経験を蓄積しえた故に、学生は自らの成長を見出せたのだと言える。

他方で、「何度もグループで試行錯誤して、指導案を考える」「同じ経験値の立場同士が意見を出し合う」「複数人の考えをもとに考察した」「他者との意見交換の大切さに気付いた」などとあるように、学内代替演習の長所①と②に係る事項も、学内代替演習の学修成果として挙げられていた。学内代替演習の長所③に係る事項は、理論的には長所①と②に係る事項を基盤として成立している。それ故、長所③に係る事項が学内代替演習の学修成果として挙げられたということは、長所①と②に係る事項が、授業において十分に作用していたということに他ならない。保育現場においては、保育士の専門性の向上を図るために、他者の意見を受け止め自らの保育を省みる姿勢が求められているが、グループ活動における課題の共有や意見交換はまさにその端緒となるものである。言い換えれば、学内代替演習でのグループ活動の成否は、各グループ内のコミュニケーションの如何にも

かかっており、学生にとって、学内代替演習とは、コミュニケーションを創出したり、チームワークやリーダーシップを発揮したりする場でもあった。オンライン上でのグループ活動という特殊な状況ではあったが、最終的には全てのグループが、同じ立場と境遇にある仲間とともに、ひとつの課題を共有したり、時間をかけてそれに取り組んだり、意見を交わしたり、批評し合ったりする中で、相互に学び合い高め合うような止揚的・互恵的な関係性を構築するに至っている。実際に「実際の保育でも職員間で協働して保育をする大切さを学べた」ともあったように、長所①と②のような、互いにじっくり考えたり意見を交わしたりする学びの過程そのものが、学生に保育士同士の連携や協働の重要性への気付きを促すことにも繋がったと考えられる。総じて、学内代替演習における多様なグループ活動を通じて、学生は保育に係る新たな知識や技能を身に付け、より多面的・多角的な視点を育むことは勿論、「チームで行う保育」の基礎となる「主体的・協働的にその資質・専門性を向上させていくこと」や「共通理解を図りながら、保育に取り組むこと」<sup>18)</sup> などへの知見も深めていたことが分かる。

## 2. 理想の保育者像の描出

保育実習Ⅱの事後指導（保育実習指導Ⅱの授業の一部）として、学内代替演習の振り返りを実施した際、目指す保育者像の明確化も同時に行った。自分の理想の保育者の姿を思い浮かべることが、今までの学修を総括したり、今後の具体的な目標を設定したりすることと同義であり、学生の継続的な学びに資するものである。表3に示されるような、学内代替演習ならではの学修成果を踏まえ、学生は、自分の将来の保育者としてのイメージを、具体的にどのように抱きえたのだろうか。学生が挙げた理想の保育者像の一例は以下の如くである。

表4 学内代替演習での学びを振り返り、自分の理想の保育者について述べなさい。(回答は自由記述式)

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども主体の保育者が理想である。今回の学びを通して、子ども主体のつもりでも、所々で保育者に都合の良い考え方や捉え方をしている自分がいたのではないかと考えられる。そうではなく、子どもの現在、今後の発達を捉え、子どもの目線に立てることが重要である。また、そうしたより良い保育のためには、連携・協働も必要だと学んだため、他者と協力しながら、子ども主体の保育を行えるようになりたい。</li> <li>・授業を通して、子どもの映像を何度も見ながら、発達段階について理解したり、同じ年齢でも異なる姿を知ったりすることができた。このことを踏まえ、保育現場では一人ひとりの発達を知り、必要な支援について常に考えたり、その子どもについて理解したりすることで、子どもに寄り添う保育を行いたい。</li> <li>・私は、子どもの安心できる存在である保育者を理想とする。ビデオの視聴で子ども理解を深め、個々に合った関わりが必要だと理解し、一人ひとりを様々な視点から捉えて保育をすることの大切さを理解した。子どもの安心できる存在であるためには、個々を理解した関わりができることが重要であると考えられる。この学びを生かし、子どもが「この先生なら自分のことを分かってくれる」といったような、安心感を与えることができる保育者を目指したい。</li> <li>・今回の実習で、自分からの視点だけでなく、他者の視点も取り入れることで、様々な視点から保育を捉えることの重要性を学ぶことができた。また、映像を通して子どもの発達の特徴や保育者の関わりなどを理解した上で、指導案を作成することができた。これらの学びを活かし、保育者同士で意見交流を行い、子どもの発達の特徴や個性の違いに気付き、子ども一人ひとりに寄り添える保育者であることが、自分の理想の保育者である。</li> <li>・私の理想の保育者は、子どもの気持ちに寄り添うことのできる保育者である。保育実践において、子ども役と保育者役で分かれて行った際に、子ども役では、子どもの気持ちを知ることができ、保育者役では、子どもの気持ちを考えて行動することができた。これらから、子どもの状態や、何に興味を持っているのかなどを常に考えながら関わることで、子どもの気持ちに寄り添うことのできる理想の保育者になりたいと考える。</li> </ul> |
|--|

- ・グループで保育実践の発表する際に、子ども側と先生側に分かれたことにより、子ども側は2歳児の子どもの様子を想定し真似をする機会を得て、この説明の仕方では伝わらないかもしれないなど、子ども側だからこそ分かった部分もあった。そのため、保育者になったら、まずは子どもの目線で考え、子どもの見え方と教え方の向きは同じなのかを考え、一人ひとりの個性を認めたり、共感したり、思いを発展させたりできる保育者になりたいと考える。
- ・私の理想の保育者とは、子どもの気持ちにしっかりと寄り添いながら、保護者からも信頼される保育者である。実習では、保護者対応をなかなか見ることができず、学ぶ機会がなかったが、今回の学内代替演習では、動画を通してではあるが、保育者がどのように保護者と関わっているのかを、しっかり学ぶことができた。そして、子どもの発言や姿から、しっかり気持ちに寄り添い受け止めていると感じた。
- ・私の理想の保育者は、子どもからは勿論、保護者と同じ職場で働く仲間からも信頼される保育者である。そのために、子ども達への理解を深めること、保育の向上に努めることが求められる。学内代替演習において、自分一人の力ではなく、仲間の意見を取り入れ、ともに活動を行うことで、様々な気付きに繋げることができることを学んだ。それらが、保育の向上に繋がると考えられる。
- ・保育実践で2歳児を演じ、実際に子どもの目線になってみることで、子どもの言動を予想し、子どもの気持ちや動きを理解することができ、課題点や改善点を見つけられることを学んだ。このことを踏まえ、子どもの立場に立ち、子どもの目線で保育内容や関わりを考えられる保育者になりたい。また、常に自己評価や反省を行って自分の保育を見つめ直し、他者からの評価や指導を素直に受け止め、自己成長や保育の質の向上に繋がられる保育者になりたい。

概して、多くの学生が、子どもに寄り添うことができる保育者を、自分の理想の保育者の姿として思い浮かべるとともに、寄り添うために必要な資質・能力については、映像資料の視聴や模擬保育の実践に係るグループワークからの学びを勘考している。換言すれば、学生は「理想の保育者像」という観点から学内代替演習での経験や出来事を振り返り、自身の学びや気付きを整理し、今回の学修に意味を見出し、今後の課題や目標を具体的に設定しようとする中で、学内代替演習での学びを「(保育者同士の) 連携・協働」「子ども主体の保育」「子ども理解」「個々を理解した関わり」「保育者の関わり」「子どもの発達の特徴や個性の違い」「子どもの気持ち」「子どもの目線」「自己評価や反省」「他者からの評価や指導」「保育の質の向上」などに関するものとして捉えていたのである。学生が自らの成果として自認し、自らの今後の目標と結び付けた学修内容は、本来の保育実習Ⅱにおける学修内容と本質的に異なるものではない。その意味においては、本学が保育実習Ⅱの「到達目標及びテーマ」として掲げる5つの項目を、学内代替演習という学びの形態においても、学生はしっかりと達成することができたと言えよう。

## V. 考察・まとめ

令和2年度の保育実習Ⅱは、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う様々な事由から、保育現場での実施を中止し、養成施設内での学内代替演習にて実施した。本学では、最悪の事態を想定しつつ如何にそれを回避し、どうすれば限られた条件のもとでも必要な知識や技能を修得させえるかを探求してきた。本質的な課題として、学内代替演習では「具体的な実践を通して理解を深める」ないし「具体的な実践に結びつけて理解する」<sup>19)</sup> ための活動を展開することは難しく、保育現場に係る学びはどうしても間接的なものに止まらざるをえない。学生からの声にも「子ども達と直接関わり、実際の様子を見ての活動ができなくて非常に残念だった」「実際に子ども達を目の前にして行うものではなく、学生同士で模擬保育を行うことでしか実践ができなかった」などとあったように、保育現場での実践的な経験を積みなかつたことに対する学生の口惜しさは根強かったと言える<sup>20)</sup>。

学内代替演習の授業に臨むにあたり、全ての学生において「保育士としての知識や行動を身に付けることができるのか、正直とても不安であった」ことは想像に難くない。だが、グループ活動を通じて「他者との意見交換の大切さ」を「保育実習を実際に行うよりも強く」感じた学生もいれば、映像資料での子どもの観察を通じて「子どもの視点だけでなく、保育者の視点から子どもの比較をすることができるようになった」という学生もいるように、「通常とは異なる実習だったが、学内代替演習だったからこそ学ぶことができたこと」があったことも事実であろう。むしろ、多くの学生が学内代替演習の特性を肯定的に受け止め、グループ活動がもたらしえる恩恵を享受できたことに鑑みれば、本学では、学内代替演習をもって、保育実習Ⅱに必要な教育を遂行することができたとも判ぜられる。学内代替演習への取り組みを通じて学生の「不安」を解きほぐし、保育現場に立つための準備と自信の獲得に繋がるような学びを提供することができたのであれば、ひとつの授業としては並ひと通りの成功であったと言えるだろう。

## VI. 今後の課題

以上のように、グループでの議論を介した映像資料の分析と模擬保育のPDCAとを軸とした学修活動を採用した今回の学内代替演習は、或る一定の学修成果を収めることができた。しかし今回の学内代替演習そのものが、前例のない授業であったこと、急遽40コマ分の授業内容を構成しなければならなかったこと、筆者が全ての授業の業務を担当したことなどから、授業の内容や方法について事前に十分な吟味を行うことができなかった。歴とした事実として、あらゆる点における準備不足が否めない中で、手探りしながら授業を計画し実践していたことを振り返れば、今回の学内代替演習には、学びの質の確保に係る懸念が残ったとも言えよう。

学内代替演習は、学外実習の中止をもって初めて企画・立案されるという点において、本来的に暫定的かつ姑息的なものである。だが、新型コロナウイルス感染症の終息の目途が未だに立たない以上、今後も学外実習に代えて学内代替演習を実施する状況に置かれることは容易に想像される。それ故に、如何なる条件下であっても、最も高い学修成果を発揮しえる学内代替演習を講じようとするならば、あらかじめ多岐にわたる選択肢を持った上で、学生の実態や情勢の変化に即して柔軟に対応することが肝要となる。まずもって、本学における人的・物的資源を学内代替演習という観点から分析し直すとともに、他学部や他大学の取り組みを検証したり比較検討したりしながら、より効果的な学内代替演習の在り方を継続的に模索しなければならない。畢竟、今回の学内代替演習の経過を改めて精査し、学生からの回答の内容に係る統計的分析も含めて批判的・総合的にその是非を勘案した上で、如何に多種多様な教育資源を揃えうるか、かつ、如何にそれを適切に活用しえるかを試行錯誤していくことが、今後のさらなる課題となる。

## 注・引用文献

- 1) 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について（令和2年3月2日付け）；<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000602227.pdf>（2021/11/01）
- 2) 谷田貝公昭ほか編：改訂新版保育用語辞典，一藝社，東京，358頁，2019年。
- 3) 厚生労働省：指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成30年4月）；[https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing\\_hyk/reference/index.html/material4.pdf](https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/index.html/material4.pdf)（2021/11/01）
- 4) 同省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について（令和2年6月15日付け）；<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000640105.pdf>（2021/11/01）
- 5) 同省（注1）



- 6) 同省 (注 4)
- 7) 名古屋大学高等教育研究センター：授業の基本 6 章 学生を授業に巻き込む；<https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/basics/discussion/index.html> (2021/11/01)
- 8) 松尾吉陽、野島淳司：グループ活動の実践とその意義についての一考察—2 次関数の活用の授業を通して—；[https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=30669&file\\_id=21&file\\_no=1](https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=30669&file_id=21&file_no=1)
- 9) 今回の学内代替演習は、主として Google Meet を利用した遠隔授業 (リアルタイム型) での実施であり、グループワークの大半もオンライン上で行われている。学生に対しては、全体会場用の会議 ID の他に、グループごとにディスカッション用の会議 ID を発行し、指示に即して使い分けるようにさせた。即ち、授業開始時には全体開場用の会議 ID を用いてログインし、全体説明が終わったらディスカッション用の会議 ID を用いてグループごとの会場に移動して課題に取り組み、時間になったら再び全体会場に戻ってきて発表を行う、という流れのもとで授業を行った。
- 10) 堀由里、小嶋玲子、野口啓子、金子晃之：新型コロナウイルス感染症対策に伴う保育実習学内プログラムの作成と課題、桜花学園大学保育学部研究紀要, 23 : p.193, 2021.
- 11) 中京新聞：保育実習にもコロナ影響 学生が代わりに「園児役」(2020 年 6 月 24 日)；<https://www.chunichi.co.jp/article/77630> (2021/11/01)
- 12) 厚生労働省：保育所保育指針解説 (平成 30 年 2 月)；<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf> (2021/11/01)
- 13) 同上。
- 14) 同省：新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を公表しました；[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431\\_newlifestyle.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html) (2021/11/01)
- 15) 岐阜聖徳学園大学短期大学部：教育・保育実習のてびき 2020 改訂版：岐阜聖徳学園大学短期大学部, 2 頁, 2020.
- 16) 倉橋惣三：子どもの心 (上), 倉橋惣三文庫③, フレーベル館, 東京, 49 頁, 2008.
- 17) 厚生労働省 (注 3)
- 18) 同省 (注 11)
- 19) 同省 (注 3)
- 20) 木村・千原は、自ら教育実習の補充に係る学内実習に携わり、「現場での実習で気づいたこと疑問に思ったことなどをグループ討議し模擬保育をしたことは、実体験を基にしたより深い学びになった」と一定の成果を認めつつも、それが「本来の学びが得られない環境」であり「現場での実習の短縮をせざるを得なかったことは、学生にとって残念なこと」であるとしている (木村弘子・千原智美：新型コロナウイルス感染症の流行下における学内代替実習の現状と課題—介護実習と教育実習において—；[https://www.jstage.jst.go.jp/article/koshient/39/0/39\\_53/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/koshient/39/0/39_53/_pdf), 2021/11/01)。両名の主張は、如何に学外実習での学びの喪失を補充しえるかという点に、学内実習の本質を見出すものであり、畢竟、学内実習を学外実習に劣るものとして捉えているきらいがある。しかし高橋・山口・北野が断ずるように、「そもそも社会的な状況によって制限が生じる以上、選択することが不可能な授業形態との比較による議論は不毛である」ことも確かであろう (高橋一夫・山口香織・北野富美子：保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察 (4) —新型コロナウイルス感染症対策下における実習指導の在り方について—；[https://kobe-shinwa.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=3359&file\\_id=22&file\\_no=1](https://kobe-shinwa.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=3359&file_id=22&file_no=1), 2021/11/01)。学修の前提となる教育環境が本質的に異なるならば、安易に学内実習と学外実習の優劣を比較することはできない。むしろ、両者の長所と短所を検証し、相互に取り入れていくような議論こそ必要であるとも言える。

※本研究は、岐阜聖徳学園大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得たものである (承認番号：2021-19)。

※本研究において使用した学生の著作物（保育実習指導Ⅱの授業課題として学生が提出した文書や文章）は、利用目的や個人情報の取扱い等に係る説明を事前に行った上で、学生から利用の許諾を得たものである。

また、著作物の利用の許諾に当たっては、第9・10回目の授業時（令和2年11月9日3・4時限目）に、学生に対して以下の事項を口頭で説明した。

- ①保育実習Ⅱの学内代替演習ないし保育実習指導Ⅱの授業課題として提出した自分の文書ないし文章を、本研究において利用される（ただし、全員の文書ないし文章の全てが、本研究において使われる訳ではない）ことによって、特定個人の識別をはじめとした不利益を被ったり、何かしらの負担や危険性が生じたりすることは全くない。
- ②保育実習Ⅱの学内代替演習ないし保育実習指導Ⅱの授業課題として提出した自分の文書ないし文章を、本研究において利用されたくない場合には、卒業までに申し出てもらえれば自由に断ることができ、断ったことを理由に学業成績や単位取得の上で不利に働くようなことは全くない。
- ③卒業までに申し出がなかった場合には、利用に同意したものとして扱う。
- ④本研究が発表される場合は、短期大学部の学内紀要に掲載されることになるため、本学の大学図書館で任意に閲覧することができる。

※本研究の遂行に当たり、著作物の利用を認めてくださった学生諸氏に対し、この場を借りて心から感謝申し上げます。